今年のお花見

暖かくって、まさにお花見日和だった昨日は、今年の日本語講座のお花見でした。

去年はみんなで名古屋城に行ったんですが、今年は徳川美術館へ。

朝１０時に駅に集合して、普段はあんまり喋れない他のクラスの生徒たちともお喋りしながら電車に乗りました。

中国のＭさんやＫさん達は子どもの話をしていたんですが（二人とも、２０歳くらいの子どもがいるので）、Ｋさん「今、子ども、中国いる。放射能、怖い・・・」

うん・・・こうやって言われてしまうと、日本人としても、日本語教師としても、返す言葉がありません・・・。やっぱり、ただ、悲しい。悲しくて、悔しい。

徳川園に着いてからは、良いお天気の下、のんびりとみんなで園の中をまずは散策。

桜は少なめだったけど、さすがは尾張徳川家の敷地だけあって、池や滝などの散策路をゆっくりお散歩。

中国やベトナムメンバーは、写真を取るのがすごく上手くって、それぞれみんなモデルのように（笑）ポーズを取ってました。

中国のＭさんはだいぶ日本語が喋れるようになってきたけど、ベトナムメンバーは、

私「きょうは、朝、何時に起きたんですか？」←（「けさ」っていう言葉は避けてみた）

Ｓさん「・・・・・・・・・・？？」（苦笑い）

う～ん、これ、この間授業でやったんだけどな～（苦笑）

やっぱり、教室で絵カードをみながら、ちゃんと「動詞」を「取り上げて」練習するのと、普通に日常会話で話しかけて答えるのとでは、状況が全然違うから、たぶんＳさんは頭真っ白状態になったんだろうなあ・・・

隣でクラス３講師Ｋさんが「日本語頑張ろう！」って声をかけてみたり（笑）

（そして、来週の授業では、やっぱりまずは「動詞」の復習からやろうって、決意☆）

お昼もみんなで園の中で食べた後、午後は「徳川美術館」の中へ。

今回の展示は「徳川将軍と尾張の殿様」展。

ここでは、クラス３講師Ｍさんが、「じつは「居合い」をやっていてね・・・」と、刀剣や鎧なんかにとっても詳しくて、展示してある重要文化財や国宝級の刀剣の、細かな部位の名称や謂れ、変遷なんかをたくさんガイドしてくれました。

いや、いつも思うんですが、人って思わぬ知識や得意分野を持ってるものなんですよね～。

Mさん「「太刀」っていうのは、主に鎌倉時代の細くて反りがあるもので、「刀」っていうのは江戸以降でもう少し太くて反りが少ないもの。「刀」は「指す」って言うけど、「太刀」は「履く」って言うし、腰にさす時の刃の向きも逆」とか、刃紋の違い話などなど、いろいろおもしろかったです。

思わぬガイドさんを得て、楽しく観賞。

http://blog.alc.co.jp/blog/nonbe_7_nori/202858

花見

桜の木は日本全国に広く見られその花は春の一時期にある地域で一斉に咲き、わずか 2 週間足らずという短い期間で散るため毎年人々に強い印象を残し、日本人の春に対する季節感を形成する重要な風物となっている。その開花期間の短さ、そしてその花の美しさはしばしば人の命の儚さになぞらえられる。そのためか古来、桜は人を狂わせるといわれ、実際花見の席ではしばしば乱痴気騒ぎが繰り広げられる。一方で花を見ながら飲む酒は**花見酒**と呼ばれ、風流だともされている。陰陽道では、桜の陰と宴会の陽が対になっていると解釈する。

花見の歴史

花見は奈良時代の貴族の行事が起源だと言われている。奈良時代には中国から伝来したばかりの梅が鑑賞されていたが、平安時代に桜と変わってきた。その存在感の移り変わりは歌にも現れており『万葉集』において桜を詠んだ歌は 40 首、梅を詠んだ歌は 100 首程度だが、平安時代の『古今和歌集』ではその数が逆転する。また「花」といえば桜を意味するようになるのもこの頃からである。

『日本後紀』によると、嵯峨天皇が 812 年に神泉苑にて「花宴の説」を催した。これが記録に残る最初の桜の花見だとの説がある。831 年から場所は宮中に移り、天皇主催の定例行事として取り入れられていった。その様子は『源氏物語』「花宴」に描かれる。『源氏物語』には藤を鑑賞する宴会についての記述もあるが、この頃には「花」はほぼ桜と同義に使われるようになっていたためか桜以外の花を観賞する宴が花見、花宴といわれることはない。

吉田兼好の『徒然草』には貴族風の花見とそうでない田舎ぶりの花見の違いが説かれており、室町初期には地方の武士階級にも花見の宴は行われていたことが伺える。

花見の風習が広く庶民に広まっていったのは江戸時代、徳川吉宗が江戸の各地に桜を植えさせ、花見を奨励してからだといわれている。江戸で著名な花見の名所には愛宕山などがある。この時期の花見を題材にした落語としては『長屋の花見』や『あたま山』がある。